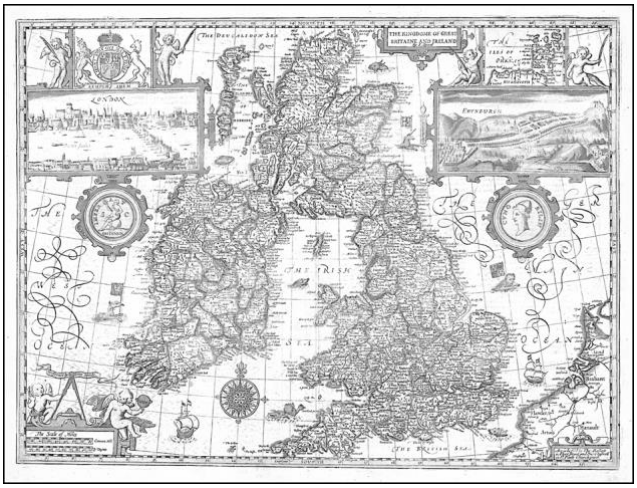
John Speed の大英帝国地図と *Cymbeline*

勝山貴之

1. James 国王の Britain 構想と John Speed の大英帝国地図

Elizabeth 女王亡き後、England と Scotland 両国の王座についた James I は、1604 年、王国の名称として古称 Britain を冠することを定めた。この新たな時代に向け、国威発揚を目的として製作されたのが、John Speed の手になる大英帝国地図 *Theatre of the Empire of Great Britaine* (1608)である。一見すると Speed の地図は、新国王 James の思い描く両国統合の理想を共有し、Great Britain への国名改称に賛同の意を表明したものであるように見えるものの、精査するなら、地図に描き込まれた紋章や首都の挿し絵に至るまで、そこには様々な齟齬が見て取れる。Speed は地図を通して新国王の提唱する Britain 王国への賛美と賞賛を描こうとしながら、England 人である彼自身の抱く優越感や偏見が意図せず反映されることとなった。Speed をはじめ多くの England 人にとって、Britain 王国の誕生は England と Scotland が統合されるのではなく、あくまで England の覇権が Scotland に及ぶことを意味していたからである。James が理想として掲げ、Scotland 人が思い描いた両国の対等の関係など、そこには存在するはずがなかった。



England は過去の歴史の中で Wales 併合を経験している。1282 年 Wales 公国の Llywelyn ap Gruffydd が England 王 Edward I に敗北し、Wales は England の支配下におかれた。Edward 王は、Wales に England の法律を強制し、重大犯罪に対しては、支配の秩序を乱すものとして厳罰が課せられた。その後、薔薇戦争を経て 1485 年に England 国王の地位についた Henry VII は Wales 大公の血をひき、以降の Henry VIII、Edward VI、Mary、そして Elizabeth へと血統は受け継がれて、Wales が England 国王を誕生させる聖なる地とされた。法制度上は、1536 年に Henry VIII が発布した「Wales 併合法(Act of Union)」により、Wales の司法・行政は England 法のもとに統一され、Wales は England に完全に組み込まれることとなったのである。

Shakespeare 劇 *Cymbeline* (1610)は、こうした Wales 併合をめぐる過去の記憶を観客の脳裏に呼び覚ます。England の覇権に抵抗を示す Wales をどのように懐柔し、粗野な Wales 人をいかにして文化的に洗練された England へと組み込むかという問題は、かつてより England 人が抱き続けてきた内なる葛藤と懸念に他ならない。そしてこの難問は、そのまま Scotland を如何にして England に組み入れるかという問題の写し絵ともなっているのである。

2. *Cymbeline* に見る Wales に対する Britain(England) 支配と文化統合

Cymbeline の中で Milford Haven は、Imogen や Cloten の暮らす宮廷からは地理的に遠く離れていることが強調される。宮廷人である彼らからすれば、London から遠く離れたこの Wales の山奥で暮らす者は、「野蛮人(“savage”)」(3.6.18)に他ならない。山中で Guiderius たちに遭遇した Cloten は、彼らを「盗賊 (“a robber”)」(IV. ii.74)「無法者(“A law-breaker”)」「悪党 (“a villain”)」「盗人(“thief”)」(IV. ii.75)と決めつけ、成敗してやると威圧する。(劇中では Britain であっても、当時の観客からすれば England と見なしていることから、ここではあえて Britain(England)と表記する。) 相手が自分の地位に怖気づかないと見て取るや、Cloten は「ロンドン(Lud’s-Town)の城門に貴様たちの首を晒してやる」(IV. ii. 99)と、Guiderius たちを Britain(England)の法に従わなったかどで処刑するぞと脅しをかける。まさに Cloten は、Wales に暮らす人々を強制的に法治国家 Britain(England)に組み入れ、自らの法によって裁こうとする専横的イデオロギーの象徴的人物と言える。戦いの末に、この暴力的な征服者である Cloten を倒した Guiderius は、「法律は我々を守ってはくれない、だから我々も法律を恐れ、傲慢無礼な輩に脅されても、おとなしく引っ込み、そいつが裁判官と首斬り役人を一人で演じるのを見ていることはない」(IV. ii. 125-30) と、自分たちの立場の正当性を主張する。Cloten が行使するような、Britain(England)の政治体制および法制度の強制的な押し付けや弾圧は、Wales の民の心をいっそう頑なにし、不服従や反抗心を養うことになるのである。

その点において、Imogen の対応の仕方は全く異なる。空腹を満たすため、Belarius たちが暮らす洞穴で思わず残り物を口にした Imogen は、自らの無作法を「食べものを恵んでいただくか、売っていただこうと思って」(III. vi. 47) と弁解し、「この食事代を、食卓の上においていくつもりでした」(III. vi. 50)と非礼を詫びている。しかし Belarius は自分たちを、「野蛮な人間と思ってくれるな、またこの住処を見て我々の善意を疑わないで欲しい」(III. vi. 64-65)と優しく声をかけ、彼(女)を温かく迎え入れる。彼らの紳士的な態度に触れた Imogen は、Wales の山中

に暮らす人々を「野蛮人」と思い込んでいた自らの偏見を恥じる (IV. ii. 32-34) 。Wales 地方に対する Britain(England)人たちの偏見や差別意識を和らげ、そうした自らの固定観念に対する反省を促すよう、Imogen と Belarius たちとの交流が舞台上に描かれる。こうした場面は、Britain(England)による Wales の併合が、平和と調和のうちになされるべきものであるということを、舞台を観る者にあらためて説くこととなり、両国の和解と融合の方策が示されるのである。

しかしだからと言って、両国の関係が平等・対等であることを表明するものではないことは明らかである。劇の終幕では、Britain に攻め込んでくる Rome 軍と、それを迎え撃つ Britain 軍・Wales 民衆の激戦が描かれる。Rome 軍を撃破し、戦勝に湧く Britain 軍の陣営で、氏素性を尋ねる Cymbeline 王に対して、Belarius は、「私たちはカンブリアで生まれた紳士階級のものです」(V. v. 17) と答えている。王は、三人の戦場での功績を讃えて、彼らに Britain の騎士の称号を与える("Bow your knees./ Arise my knights o' th' battle. I create you / Companions to our person, and will fit you / With dignities becoming your estates." V. v. 19-22) 。Cymbeline 王は Wales 人の彼らを宮廷に迎え入れ、自らの支配下に組み込もうとするのである。Britain(England)の支配は、Wales の紳士階級を呑み込み、組み込むことによって、事実上両国の併合が成し遂げられる。侵略してくる Rome 軍を撃退する中で、いつの間にか Wales の民は Britain(England)軍に吸収され、Wales の紳士階級は Britain(England)社会に組み込まれることとなるという展開である。Britain(England)は Wales を完全に併合し、自分たちの覇権のもとに組み敷いたと言える。

劇の大団円では、Wales が Britain(England)に併合され、外国勢力とも和解することで、平和が訪れる様が描かれている。それは暗黙の了解として、現実世界において England と Scotland がひとつに結び合わされ、Britain となることで、外国勢力に対抗する強固な王国となり、同時に外国との宥和政策によって、真の平和が訪れることへの期待を描くものである。しかし劇の中で、真の意味における Wales と Britain(England)の平等な関係が描かれることがないように、Scotland と England の関係もまた同じ構図であることを観客たちに暗示している。両君連合により、Scotland と結び合わされることで、自分たちの名誉が汚され権益が奪われるのではないかという、England 人たちの心に渦巻く不安は、劇の展開の中で雲散霧消し、England に対する愛国心と England 人であるという自負と誇りの内に、新しい国名 Britain を単なる政治的決着という形式的なものとして、納得し受け入れることが可能となるのである。劇は、Wales と Britain(England)の穏やかな融和の姿を描くように見えながら、その裏では、Britain(England)の覇権が確実に担保されていることを無視することはできない。同じく Scotland と England の統合も、両国の真の意味での合併ではなく、England の覇権が Scotland に及ぶことを暗黙の内に保証するものなのである。

3. 結論

今回の発表では、Speed の大英帝国地図 *Theatre of the Empire of Great Britaine* を繙きながら、新国王 James の唱える Britain 王国への賛美と賞賛を理解しつつ、その裏に秘められた不協和音を読み取ることを試みた。そしてそれは、劇 *Cymbeline* が上演された当時の England 人が、心のうちに秘めた Wales への不安と懸念と響き合うことを確認し、劇の展開がそうした観客の内面の葛藤を浄化する働きをしていることを論じた。舞台を観守る者たちは、Imogen と共に Wales の地へと踏み入り、そこで気高き「野蛮人」と遭遇することによって、自らの偏見や差別意識に気付かされる。しかし最終的には Wales の人々を Britain(England)の中に組み入れ、自らの支配下に置くことによって、Britain(England)の覇権を再確認することで、England 人たちは自らの内なる不安から解放されるのである。そしてそれは Scotland との合併に対する嫌悪や反発からの無意識の解放を意味するものでもある。それは文化の融合の難しさを示しつつも、同時にその解決を演劇という架空の世界の中で疑似体験させてくれる。地図と演劇は、同時代に生み出された異なるテクストでありながら、両者は互いに共振し、共鳴しあっている。いずれもその時代を生きた人々心性を色濃く映し出したものなのである。

主要参考文献

Boling, Ronald J. "Anglo-Welsh Relations in *Cymbeline*." *Shakespeare Quarterly*, vol. 51, no. 1, Spring 2000, pp. 33-66.

Griffiths, Huw. "The Geographies of Shakespeare's *Cymbeline*." *English Literary Renaissance*. vol. 34, no.3, 2004, pp.339-58.

Ivic, Christopher. "Mapping British Identities: Speed's *Theatre of the Empire of Great Britaine*," *British Identities and English Renaissance Literature*. Edited by David J. Baker and Willy Maley. Cambridge UP, 2002. pp. 135-55.

Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare.* Edited by G. Blakemore Evans. 2 nd ed. Houghton Mifflin, 1997.